



2020年度 第43回 県連交流集会in奄美



現地実行委員会ニュース 号外

2020年度4月発行

奄美中央病院 実行委員長：折田 浩

県連交流集会in奄美 来年へ延期！



「第43回県連交流集会in奄美」は、新型コロナウイルス感染症対策により、来年へ延期が確認されました。これを受けて、記念講演の講師である金城先生へ連絡した所、先生より

「まさかの延期」ですよ！でも中止ではなく延期ですから！と有り難いお言葉とメッセージを頂きましたので、是非とも全職員へお目通しを頂きたくニュースを送付致します!!



金城隆展先生
(きんじょうたかのぶ)



新型コロナウイルス感染症にどう向き合うべきか？

新型コロナウイルス感染症が日本国内はもとより世界中で猛威を振るっています。

WHO も「新型コロナウイルスはパンデミックと言える、相当する、見なすことができる、表現できる」等々(まぎらわしい表現ですが・・・)、遂にパンデミックを宣言する事態となり、私たちの生活に様々な影響が出ています。

多くの人々が一生懸命準備してきたイベントは次々と中止になり、沢山の笑顔やかけ声で溢れるはずの卒業式は縮小され、街から人々がいなくなり、株価は暴落し、人々はマスクやトイレトペーパーを購入するために列をなし、連日連夜の新たな感染拡大の報道で私たちの心は乱され、他者を思いやる余裕すらなくなり、まさに「心が荒む」日々が続いています。このような状況の中で、私たちはどのようにこの新型コロナウイルス感染症に向き合うべき(倫理)なのでしょう？

正しい知識で正しく恐れる：

「正しい知識」を持つことが、感染の倫理の第一歩であることは疑う余地がありません。新型コロナウイルスの正しい知識を持つことによって、私たちはウイルスを恐れすぎることなく、さりとして、恐れなさすぎることなく、正しく恐れることが出来るようになるのです。新型コロナウイルスを恐れすぎると、私たちは経済を含むあらゆる人間活動を自粛することになり、これは社会の崩壊を意味します。ところが逆に新型コロナウイルスをおそれなさすぎると、自由に活動するあまり、私たちは感染拡大に荷担し、多くの高齢者や基礎疾患患者が死亡する事態を招いてしまうでしょう。大切なのは正しい中間を見極めることです(中庸の倫理)。新型コロナウイルスは飛沫・接触感染であるという知識を理解することで、閉鎖空間で不特定多数が集まる空間・イベントを避ける・自粛することで、大規模なクラスター発生を防ぎつつ(恐れなさすぎず)、しかしながら、私たちが生きていく上で必要な社会経済活動を持続させる(恐れすぎず)という中間が見えてくるのだと思います。

外からの規制と内なる働きかけ：

感染の倫理には、1)闘う相手が見えない、2)倫理的配慮の対象となる人たちが三人称であるが故に動機付けが難しい、という特徴があると思います。新型コロナウイルスの場合、潜伏期間が比較的長く、しかも健康な人だと軽症ないし無症状である場合が多いが故に、その脅威が見えずらく、結果的に知らず知らずのうちに高齢者や基礎疾患を有する人たちを感染させてしまうという特徴に加えて、新型コロナウイルスから守らなければならない高齢者や基礎疾患を有する人たちが実際に目の前にいないが故に、感染対策を内的に動機付けすることが難しいという特徴があると思われます。だからこそ感染の倫理はどうしても「外からの規制」という形を取りやすいのです。ところがこの「外からの規制」は「思考停止」という副作用が伴うことに留意しないといけません。感染拡大を防ぐという大義名分のもと、自分たちの自由が制限されることが当たり前になってしまい、その結果、私たちは自分自身が「尊重されるべき存在」であることを忘れてしまい、知らず知らずのうちに自分自身や

周りの人をぞんざいに扱ってしまうという悪循環が今まさに、私たちの社会で起きているように思います。この悪循環を断ち切るために「なぜ私たちは自分たちの自由を制限してまで感染対策に参加するのか」を思考停止することなく考え抜くことが必要なのです。ところが政府の発表やマスコミの報道を見る限り、外出の自粛要請や手洗いの推奨等、感染対策の内容はよく言及されるものの、「なぜそうすべきなのか」という根拠が残念ながら十分にアピールされていないように思うのです。

今回の新型コロナウイルスの場合、私たちが感染対策に参加すべき根拠は2つです。1つは高齢者や基礎疾患を有する人たちを守るため、もう1つは重症患者を治療する医療従事者を守り医療崩壊を防ぐためです。皆さんにお願いしたいのは、例えば感染防止のために手を洗っているその瞬間「自分は今、何のために手を洗っているのか(根拠)」を意識して欲しいのです。手を洗うように言われているから洗っているのではなく、さりとて、自分や身近な人たちを守るためだけに洗っているのではなく、目の前にいない、どこかにいる高齢者や基礎疾患を有する人のために、自分は今一生懸命に手を洗っているのだと意識し動機付けて欲しいのです。言われたからやっている(他律)のではなく、これはやるべきことだからやるのだと自分で選んで欲しい(自律)のです。なぜ楽しみにしていたイベントを中止しないといけないのか、なぜ手指衛生を徹底しないといけないのか、なぜ見えない他者を守らないといけないのか、1人1人が自分自身に問いかけ、そして、互いに話し合う努力が必要です。政府や地方自治体も、ただ自粛を要請するのではなく、なぜ自粛しないといけないのかを国民や市民にもっと問いかけて欲しいと思います。

新型コロナウイルスに向き合う自由:

もはや新型コロナウイルスを封じ込めることは不可能であり、今後は新型コロナウイルスに「どう向き合っていくべきか」が倫理的に問われていると言えるでしょう。ヴィクトール・フランクルは強制収容所の中で、どんなに困難な状況であっても、人に対して優しさを持ち続ける人たちがいたことを例に上げながら「与えられた事態にどう向き合うかは人間の最後に残された究極の自由である」と説いています。私たちには「新型コロナウイルスに対してどう向き合うか」という究極の選択の自由があるのです。つまり、変わらないといけないのはウイルスではなく「私たち」なのです。私たちが「外からの規制」ではなく「内なる働きかけ」によって「手を洗う」「閉鎖空間で不特定多数が集まる空間を避ける」「楽しみにしていたイベントを中止・延期する」ことを選ぶならば、私たちはたとえ自分の自由が制限されるとしても、心が荒むことなく、自分をぞんざいに扱うことなく、同時にまだ見ぬ他者を大切にすることが出来るのです。

最後にあと1つだけ・・・(長くてすみません)。

デマでトイレトペーパーが店からなくなるという事態が起きましたが、この時、私は(たとえトイレトペーパーの残りが1個であったとしても・・・実際は4個でしたが 笑)敢えてトイレトペーパーを買いに行きたくないと思いました。私たちの人生は小さな選択、大きな選択の積み重ねです。一つ一つの選択の積み重ねが、私たちがどういう人間になるのかを決定していくのです。今回の「トイレトペ

ーパーを買いに行くべきか否か」という選択は、単に「トイレットペーパーを買いに行くか否かの選択」の話ではなく「私たちがどういう人になるのかを決定する選択」だと私は思いました。私は(たとえデマでなくとも)自分のトイレットペーパーがなくなるから急いで買いためすることで、本当に必要な人が買えなくなる状況に荷担するような人になりたくないと思ったのです。これは決してトイレットペーパーを買いに行く人を非難しているのでもなければ、そうあるべきだと主張している訳でもありません(少なくともそんな資格を私が持っているはずがないのです)。私が言いたいのは、毎日の生活の中で私たちが直面する小さい選択・大きな選択の一つ一つが、自分がどういう人になるのかを決定する選択だからこそ、それらの選択を大切にしたい、唯一無比の2度とやり直しのきかない大切な貴方の人生なのだから、だれかに言われたからではなく(他律)、どういう人になりたいのかをよく考えて自分で選んで欲しい(自律)ということなのです。この意味で、新型コロナウイルスに向き合うということは詰まるところ、自分自身に向き合うことに他ならないのかもしれない。

あなたは何者か？

あなたはどういう人になりたいのか？

どういう人になるべきなのか？

あなたは他者と共にどう生きたいのか？

あなたはどう生きるべきなのか？

選択は常に私たちの目の前にあるのです。